

被災地支援のボランティア活動に 社員を伴って参加

北電力設備工事㈱ 代表取締役 伏木 淳

東日本大震災の発生から3ヶ月余が経った6月中旬、岩手県宮古市において、一週間の期間、私は自社の社員を連れて、YMCAが行う被災地支援活動に参加した。

まず、YMCAの支援活動としては、3月21日に盛岡YMCAが日本基督教教団・宮古教会の協力を得て、同所に「YMCA宮古ボランティアセンター」を開設。すぐに支援人員が入り、瓦礫や流着物の撤去作業を展開した。そして、日本YMCAでも全国的な支援を行う方針となり、各地ブランチが支援ボランティアを派遣し始めた。北海道YMCAでも人員派遣が企画され、各所に案内があったが、元々「ぜひ現地を見てみたい。」との想いが強かった私は、これにすぐ飛び付いた。社内から希望者を募ったところ、若手社員3名の応募が有り、私を含め計4名での参加となった。

次に、宮古市内の状況について、中心部の道路は、早い段階で瓦礫や流着物が撤去され、表面的には綺麗に整備されていた。一方で、個人の敷地内は、ヘドロの除去が手つかずのところが大半で、こういう個人のニーズに対してボランティアが活動するという構図だった。尚、震災後すぐは受け入れ体制の問題からボランティアがなかなか入れなかったが、5月頃から体制も整い、次第に増え出した。ボランティアを扱う団体としては、市の社会福祉協議会が運営のものが最大で、その他YMCA以外で3～5ほどの団体が活動していた。

そして、YMCAボランティアセンターについて、支援人員は、YMCA関係者の他、教会関係者、山岳会関係者（初期の頃から活動に従事）等、常時10～15名ほどの

人達が入れ替わりで滞在していた。

センターの生活は、YMCAのキャンプと同様、1日の

スケジュールがキチンと定まっており、また、食事準備、後片付け、掃除、洗濯等の

業務は、全員が分担して行うことになっている。ちなみに、ボランティアの最低限の具備要件は、誰とでも協同生活、協同作業が出来ること、3K（キツイ、汚い、臭い）に耐えられることの2点である。（写真上：宮古教会前に勢揃いしたボランティア）

ミーティングは1日3回と頻繁に行っていたが、通常の業務報告や業務指示、注意事項の他、「被災者と接してみても何を感じたか？」なども含め、様々な意見交換を行った。そして、夜は「時間を持って余すか」心配していたが、全国から来る様々なボランティアの方（経歴も多岐に渡る）と懇親をはかることが出来、とても有意義な時間となった。その中で、最も印象に残っているのが、池田センター長（堺YMCAのOB）の「ボランティアは単なる作業員ではない。被災者の方々の話を良く聞いてあげて下さい。」との言葉だった。

実際の支援活動について、被災者のニーズは、敷地内の側溝や住宅の床下等に浸入した「ヘドロ除去」が最も多かった。

ヘドロは、家具や寝具、衣類、書籍等にも染み込んでいて、かなり厄介だった。ある依頼者の場合は、大事な本にヘドロが染み込み、これらを天日干しすることになったのだが、1枚1枚のページを丹念

に剥がしていくのは、気の遠くなるような作業だった。（写真上：側溝に詰まったヘドロを取り除いています）

この他、業務としては、仮設住宅の入居者からの依頼への対応があった。出来たての仮設住宅には、衣紋掛けや取手、棚等が未設置で、ホームセンターで部材を購入して、それらを取り付ける大工仕事も行った。そして、全国からの支援物資（衣類、寝具、食器、食材、衛生用品、生活雑貨、等々）が集まってきており、それらを受け取り、整理、保管、そして配送する等の業務もあった。

さて、支援活動が上手く行くかのキーポイントだが、第一にはまず「地元民から受け入れられるか」ということ。そして、「ニーズを聞き出し、作業内容を提案し、人員を段取りするという『コーディネート』が上手く出来るか」ということ。池田センター長は、5月に現地に入ってから、横断歩道での朝立ちを毎朝続けるなど、地元住民との交流には大いに精力を費やしてきた。また、先に活動した「先輩達」が良い活動をした賜と思うが、YMCAのゼッケンを付けて歩いていると、暖かい言葉をよく掛けていただいた。

さて、我々が活動を終えて帰る時、池田センター長と懇談したが、宮古のセンターは、最低でも1年は、下手をすれば数年、まだ継続されるであろうとのこと。池田氏自身は7月末迄で任期終了、後任者が来るとのことだった。「まだまだ支援が必要であり、北海道に戻っても、今回の経験を多くの人に伝えて欲しい。」と熱く語って下さった。

最後に、感じたことは、「復興は一步一步着実に進んでいる」が、一方で、「元どおりにするにはやるべきことが

膨大で、相当の時間がかかる。」との両極の思いである。我々は実際に被災地に行って支援活動に携わったことは、この上ない経験であった。

写真左：【6/19 宮古市南部の被災地を視察】幅2m程の堤防



のコンクリート躯体が横倒し！

現地に行って、被災地というものを五感で感じ、被災者の生の声を聞いたこと。また、同じ志を持った者が全国から集まり、力を合わせて活動するということの意義を感じたこと。ぜひ、多くの若者に現地に行ってこういう体験をして貰いたいと思う。

私も企業人として、社会奉仕の在り方を今後とも模索して行きたい。どこかで皆様にもお世話になる機会があるかもしれないが、そういう時があればどうかよろしくお願ひしたい。



写真上：側溝に詰まったヘドロを取り除いています）



写真上：宮古教会前に勢揃いしたボランティア